伊藤隼也が行く
Shunya Ito

その方らしい最期を支える「助死師」になりたい。

伊藤隼也は、ホスピス有床診療所の玉穂ふれあい診療所（山梨県中央市）を訪問。同所の設立に関わり、今も中心となって看取り医療に携わる長田牧江さんに話を伺いました。

診療所の露天風呂の前で患者さんとの思い出を語る長田さん。

「狭い看護をしている」と気付いたのが転機のきっかけ

伊藤　長田さんはここ、玉穂ふれあい診療所を院長の土地邦彦さんとともに設立されたわけですが、もともとは病院の看護師でしたよね。

長田　山梨県内の病院に20年ほど勤務しました。

伊藤　なぜ、ホスピス診療所を立ち上げることになったのですか？

長田　病院勤務のときは外科病棟やICU、CCUなどでの看護が多く、最後の10年間はオペ室でした。手術を受けるときには必ず術前訪問や術後訪問をしますが、ふと、私たちが病棟看護師と一緒になって行っている退院指導がどれくらいその方に役立っているのだろうって、疑問を持つようになったんです。あの患者さんは、果たして手術をしてよかったのだろうか、手術でQOLが上がったのだろうか、そういうことを点検しなくて、帰しっぱなしにしていいのだろうか、と。

伊藤　看護は点ではなく、継続するものであるということに、長田さんは気付かれたのですね。

長田　ええ。私たちってなんて狭い看護をしているのだろうって考えるようになり、それで、こんな私でもバーンアウトになりまして（笑）。

伊藤　そうでしたか。

長田　結局、3か月ほど病院を休んだのですが、少しよくなってきたときに以前から気になっていた患者さんを訪ねることにしたんです。胃がんで胃を全摘された方で、もちろん退院前に術後訪問はしていたのですが、実際にお宅を訪ねてみると、指導通りの生活を送っているようには見えませんでした。それにショックを受けて、患者さんの退院後のフォローをしたいと思うようになりました。それで、看護協会の訪問看護師の研修を受け、そのタイミングで退職しました。

伊藤　院長の土地さんとはどこで知り合われたのですか？

長田　院長は私がいた病院の麻酔科医でした。何度か話をしているうちに、一緒に開業しようということになり、それで「どちペインクリニック」を始めました。

伊藤　それがホスピス診療所になった経緯も教えてください。

長田　当初は来院者を診る予定だったのですが、ペインクリニックという性格上、次第にがん患者さんの受診が増えてきて。それで私の希望もあって、訪問看護も始めました。それが18年前です。さらに訪問看護をしているうちに、家族の方から「結婚式に出るから一時的に患者さんを入院させたい」「葬式のときだけ預ける場がないか」という相談をもちかけられるようになりました。当時、山梨にはホスピスはもちろん、安心して預けられる施設がなかったので、自分たちで作ってしまおうということでできたのが、玉穂ふれあい診療所ですね。

家庭菜園に露天風呂……患者の希望を叶える施設を

伊藤　ここは目の前に畑もあって、広々していて、開放感がありますよね。床は板張りで、みんな裸足で歩いているし、暖炉もある。診療所というより旅館といったほうがよさそうな、ぬくもりを感じます。

長田　「畑仕事をしたい」という患者さんもおられるんですよ。「畑の前で最期を」とおっしゃる方も。もちろん、ここでできた野菜などはすべて診療所の食卓に上ります。

伊藤　先ほど施設内を見せていただきましたが、露天風呂もありましたね。

長田　診療所を建てたときに、ボランティアに作っていただきました。あのお風呂も温泉です。今もボランティアの方が庭の手入れをしてくれたり、患者さんとの話し相手になってくれたり、掃除や厨房を手伝ってくれたり……。多くの方の支えがなかったら、このよ

Profile

どちペインクリニック
玉穂ふれあい診療所
統括看護師長
長田 牧江（おさだ まきえ）さん

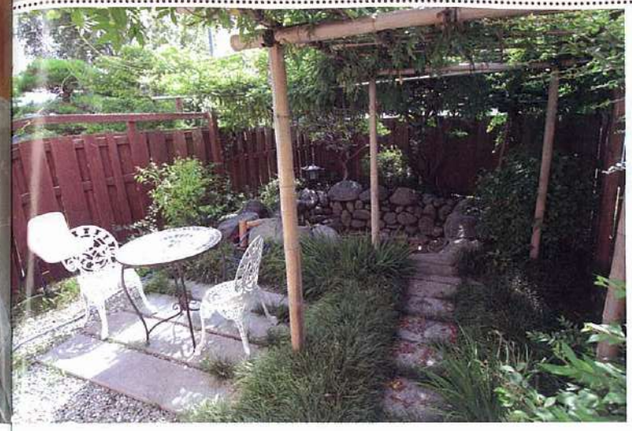
1952年、山梨県北杜市（旧明野村）生まれ。2002年「県民の看護師さん」受賞。
共著に『生きるための緩和医療有床診療所からのメッセージ』ほか。甲府看護専門学校非常勤講師。

玉穂ふれあい診療所

自然の中、家庭にいるような環境で、旅立ちを迎えられるような診療所を目指し、土地邦彦医師が中心となり、2002年に設立。一般内科、ペインクリニック、緩和ケア、終末期医療を行う19床の有床診療所。

終末期の患者さん、そしてそのご家族を守りたい――。長田さんからは強い思い、エネルギーが溢れていた。

転載・二次使用禁止



心地良い風が診療所を吹き抜け、ここにいる人々に笑顔がある。僕たちが求めるホスピスはこういうものではないだろうか。

うな環境でホスピス診療所を構えることは難しかったと思います。露天風呂はとくに好評で、亡くなる直前に家族で温泉に入ったりもされます。患者さんが望めばお風呂でお酒も出しますよ。

伊藤 お酒ですか！ ふつうはあり得ませんよね。

長田 そうでしょうね。でも、患者さんがそうしたいとおっしゃるのであれば、できるだけそれを叶えたいと思っています。だから、ここで結婚式もするし、希望があればお葬式もします。それで笑って、家族と握手して旅立っていかれるのであれば。最後まで人間としてその人らしく生きて欲しいと願います。だって、それがホスピス、終末期医療だと思うのです。

伊藤 今の日本の医療界では、こんな終末期医療が存在していることを想像できないでしょうね。アイデンティティが崩壊しちゃう（笑）。

長田 こうして患者さんと接してきて思うのは、これは必要な医療だってことです。でも、なかなかそれに気付いてもらえませんね。

気持ちよく逝くための看護 これが本来の終末期医療

伊藤 終末期医療の在り方について話を伺いたいのですが、そもそもペインクリニックと訪問看護で、ある意味、事足りていたわけですよね。しかも当初予定していた病院は、隣の甲府市医師会の反対にあって断念し、有床診療所になった。そこまでしてホスピス診療所を作ろうとした、そのエネルギーは何なのでしょう。

長田 何でしょうね。確かに大変ですし、仲間からも真剣に反対されました。でも、〝人間は誰でも必ず死ぬ。どうせなら気持ちよく逝きたい〟という部分を満たすところがない。そういうことに医療人として後ろめたさを感じてしまったと言いますか……。

伊藤 それは先ほど話された「必要な医療」ということに通じますね。実際に始めてどうですか？

長田 大変だし、必死です。ただ、苦しい中でも職員はこの施設で仕事を通して人として楽しんでいます。私もその一人です。

伊藤 お金や名誉とは違う、達成感があったわけですか？

長田 人として、でしょうか。私たちは日々、宝物を預かっています。

伊藤 かなり過激なこともされていると伺っていますが。話によると京都まで人さらいに行ったとか（笑）

長田 ええ。あのとき連れて来たのは、30代の娘さん。婦人科がんの末期で、「あまりにも痛がっていて見ていられない、何とかして欲しい」と家族から連絡がありまして。それで、ここで診ようと言うことになり、ポンコツの中古救急車で京都まで行き、主治医に「彼女を連れて帰ります」と言って、運んできました。

伊藤 それは相当過激ですね（笑）。それにしても、そんなにその患者さんは痛がっていたのですか？

長田 むくみでぱんぱんになった体を丸めて「痛い、痛い」って。ガーゼで口を押さえ、声を押し殺しながらですよ。その姿を見て身震いしました。彼女は2週間、ここで過ごしました。露天風呂に入ったり、婚約者と会話したり。お母さまは「前の病院にいたときと、ここではまったく表情が違う」っておっしゃっていました。

伊藤 京都の病院についてはどうこう言うつもりはありませんが、医師もこういう医療があるということを知らないのだと思います。かつて長田さんがオペ室にいたときのように。

長田 そうなんでしょうね。

看護協会や看護教育者ももっと現場を見て、知ってほしい

伊藤 制度的な面はどうですか？ やっぱり足りないことだらけですか。

長田 ええ！ ただ、医療行為を必要としない医療依存度の高い方たちを、ホスピスのような場所で看ることに関して、一概に制度化するのは難しいのかもしれません。

伊藤 でも、現場の裁量権は絶対に必要ですよね。

長田 もちろんです。

伊藤 国は在宅に重点を置き始めていて、在宅診療の手当を付けようとしているけれど、実際のところ、十分ではない。その一方で、病院より診療報酬が低く設定されている診療所ではホスピスが成立しにくいと考えられていますが、ここのようにちゃんと成立している診療所もある。枠にこだわらず、現実を見る必要がありますよね。

長田 ここは結果的に病院にはならなかったけれど、診療所としてのメリットもあることに気付きました。緩和ケア協議会も看護協会も専門職を作ろうとしていますが、作るにあたってもっと現場を見て、何を欲しているかをより考えてほしいですね。

伊藤 人材の面ではどうですか？

長田 理屈抜きで必要だと思います。患者さんやそのご家族と共に生き、涙を流し、という感情の共有のなかで前に進むことができる、そんな医療人を育てて欲しいですね。

伊藤 ここはどうでしょうか。

長田 みんな夢を持ち、がんばってくれています。それに見合う報酬に追いついていないので、申し訳なく思っていますが……。こうしてやり通せるのは、やはり仕事が好きだからというのと同時に、ここが必要な医療を提供している場だと感じているからだと思います。先ほどのボランティアの方の話にしても、そういう思いがこの診療所にはつまっています。

伊藤 先ほど、一番楽しんでいるのは長田さん自身だとおっしゃっていましたが、最後にそのやりがいという部分について教えてください。

長田 ここでいろいろな経験をして思うのは、やっぱり患者さんやそのご家族がお互いに感謝しあって、最後を迎えることが大事だということです。「ありがとう」「みんなと別れるのはつらいけど、幸せだったよ」と言えるような環境づくりですね。そのために一期一会のおもてなしと心を込めた傾聴と行動力を心がけていますし、別れの場がそうであるとよかったなと思います。その人の生命は次の代につながって欲しいと思います。そういう「助死師」でありたい。

伊藤 助死師ですか。重みのある言葉ですね。話を伺っていると、本来の終末期医療は「精一杯生きる」という部分につながっていることがよく分かります。僕は後方支援隊として、長田さんやこの診療所のことをずっと応援していこうと思っていますから。がんばってください。

スタッフの相談に長田さんは快く応じる。

伊藤隼也（いとう しゅんや）
写真家・医療ジャーナリスト
医療情報研究所代表
患者中心の医療を実現するため医療ジャーナリストとしてテレビや雑誌などのメディアで活動中
ホームページ shunya-ito.tv

取材・撮影：伊藤 隼也　文：山内 リカ　デザイン：医療情報研究所

転載・二次使用禁止